

〈海外留学体験記〉

アデレード大学での留学体験

視覚機能再生外科学 渡 辺 彰 英

今年の1月31日から3月31日まで、オーストラリアへ短期留学させて頂きました。これは、若手研究者海外事業・組織的な若手研究者等海外派遣プログラムの一環で、視覚機能再生研究における国際的・統合的視野を持つ橋渡し研究推進者の育成事業として京都府立医大眼科が中心となって行っているプロジェクトの一員として参加させて頂くことができたことによるもので、私にとって初めての海外留学が実現しました。このプロジェクトは平成22年より始まり、私は平成22年度最後の2カ月間留学させて頂きました。留学先のアデレード大学眼科は、Dinesh Selva教授が私の専門領域である眼形成を専門としており、これまでも世界各国からのoculoplastic research fellowを受け入れています。今回、留学先としてアデレード大学を選んだ理由は、まずオーストラリアが世界的にも眼形成領域ではトップレベルにあるということ、3年前に親交のある先生の留学先であったアデレード大学へ一度見学に訪れたことがあ

り、その際にDinesh Selva教授の手術を見学しましたが、手術のレベルはもちろん、手術中にあふれんばかりの知識を途切れることなく我々へ与えてくれていたのが印象的で、それ以来、アデレードへ行けば大変勉強になるだろうと日頃から考えていました。また、木下教授からも、留学するならアカデミックなところがいいと御教授頂いておりましたので、迷わずアデレード大学へ留学をお願いした次第です。幸いSelva教授は快く承諾して頂きましたが、当初希望していた1,2月はやや都合が悪いと言われてしまいました。南半球で日本と季節が逆になるオーストラリアでは、1月が日本の8月のようなvacation seasonで、夏休みの先生も多く、手術もそれほどないとのことでした。ただこちらとしても年度を跨ぐのは避けたいので、そのため、日本で手術学会が終了してすぐの1月31日にオーストラリアへ飛び立ち、3月31日ぎりぎりに帰国するというスケジュールで留学させて頂きました。





アデレードは、オーストラリアでも歴史のある街ですが、シドニーやメルボルンが流刑地からスタートしたのに対して、アデレードは計画して建設された街であり、碁盤目状に中心部は整備され、公園も多く緑は豊かです。メルボルンへは一度手術見学を訪れたことがあり、今回の留学中の学会参加でシドニーにも行きましたが、私の中ではシドニーは東京、メルボルンは大阪、アデレードは京都というイメージです。アデレード市内でも特に中心部北部のNorth Adelaideは治安がよいため、今回家族と共に生活するにあたり、大変よい環境でした。アパートメントを借りて大学まで徒歩で通いましたが、途中で大きな公園、大学のグラウンド、動物園などがあり、緑豊かな場所を毎日歩いて通勤することができました。小学校1年生の子供も短期間ではありますが地元の小学校に毎日通学し、あまり言葉は通じないながらもたくさんの友達を作っていたようですし、2、3月は夏から秋にかかる時期で暑いですが、カラッとした晴れの日が多くて気候もよく、休日を利用してカンガルー島や近くの国立公園、海水浴などたくさんの場所に出かけ、オーストラリアの自然を家族で満喫できました。

アデレード大学では、oculoplastic research fellowとしてDinesh Selva教授とコンサルタントのDr. Garry Davisの眼形成手術および外来見学を中心に勉強し、手術および臨床研究についてのディスカッションを多く行うことができまし

た。また、留学期間中にシドニーで行われたAPAO (Asia Pacific Academy of Ophthalmology)へ初めて参加しましたが、APAOでも実感しましたが、オーストラリアはアジア太平洋地域では眼形成をリードしている国であり、Dinesh Selva教授はその中心人物です。教室から眼形成関連の論文は多数発表されており、臨床研究・手術のレベルも高く、特に眼瞼悪性腫瘍の再建については多くのオプションを持っており、今回の留学で新しい術式を学び帰国後もすでにたくさんの症例に応用しています。外来ではエビデンスに基づく検査法を行っており、治療のみならず臨床研究へつなげる検査とは何かをよく考えているなど感じました。また、講演会および学会参加を通じて、世界の舞台で活躍するために必要な臨床および研究レベルを体感することができました。さらに、2カ月という短い間でしたが、アデレード大学眼科と当科における今後の臨床研究のプロトコルを作成し、いくつかの研究プロジェクトを立ち上げることができたのは大きな収穫でした。現在、眼瞼悪性腫瘍である脂腺癌および眼窩良性腫瘍であるPleomorphic Adenomaの多症例スタディー、眼瞼下垂の日本人とCaucasianとの組織学的差異の検討を計画しています。これらの研究を通して、国際学会への発表、英語論文の発表をコンスタントに行い、世界的な視野を持って仕事をし、アデレード大学眼科とは将来的にも継続的な共同研究を行っていきたいと考

えています。

私のように2カ月という短期間であっても、海外留学は大変貴重な経験となり、自分の仕事を世界で試すきっかけとなりました。まだ留学を経験されていない府立医大の若い先生方は今後

積極的に海外へ留学して、世界で府立医大の名を広めて頂きたいと思います。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて頂きました木下教授、眼科学教室の諸先生方に深謝致します。